

第24回母子保健奨励賞 受賞者の業績



佐藤節子氏 (50歳) 保健師・山形県

昭和49年真室川町に奉職

学童期を健康な生活習慣の基礎を確立する時期と位置付け、教育委員会との連携事業を展開。小学校における塩分摂取量を大幅に減少させた。肥満児童相談などを通して学校現場に入って保健師への期待と信頼を勝ち得、定期的な情報交換の場を持つに至った。また、国際結婚の増加によって外国籍女性への支援の必要性を痛感。町長の理解を得て通訳導入による育児支援を開始し、大変好評を得た。



本多百枝氏 (48歳) 栄養士・群馬県

昭和49年新治村に奉職

保育所と保健部門兼務の立場から妊娠時～乳幼児～就学に至るまで母子栄養指導を一貫して行う体制を構築し、自ら実践指導を積極的に行った。地域の婦人を対象に貧血予防教室を開催するなどし、村内の食生活改善に大きく寄与した。妊産婦の栄養指導に熱心に取り組み、妊娠中から子どものむし歯予防を強調。食事内容のチェック、カルシウム摂取やおやつとの与え方など具体的に食生活を指導し、成長段階に応じた手作り菓子の提供を行った。



津田真由美氏 (52歳) 保健師・石川県

昭和53年七尾市に奉職

東京都の保健師、病院小児科の看護師を経て、昭和53年七尾市に奉職。母子健康管理体制の基礎を築いて乳児死亡率改善に貢献。新たな母子保健事業の課題に取り組み、他市町村の模範となった。保健師活動の中で知り合った母親に働きかけて母子保健推進員制度の発足に尽力。ボランティア組織の体系化や市民ニーズの収集、行政への反映に努めた。保健センター設計時には利用者の安全、利便性に配慮。退職後は母子保健推進員として活動中。



相田幸子氏 (43歳) 保健師・山梨県

昭和56年田富町に奉職

母親学級の内容を見直し、助産師や歯科衛生士との協働に努めた。妊産婦の不安や悩みの相談、妊婦同士の仲間作りを重点に活動を展開した。また、愛育会組織を育成して年々会員を増やし、愛育会主催の育児学級も年4回となった。育児に悩む母親の心の健康についての支援事業を立ち上げ、調査研究、精神面のスクリーニングやメンタルヘルスに対する個別支援の充実、地域関係職員の研修を行った。



羽根田千和子氏 (51歳) 保健師・長野県

昭和53年大桑村に奉職

既存の母子関連事業を見直し、母親学級への経産婦の参加を推奨。経験者から学ぶ場と捉え、参加者同士の交流や情報交換の場として定着させた。1歳児を対象に相談を実施。幼児期に大切な親子の関わり、歯の健康、食事について考える場として専門スタッフを配置。時代の要請に応えた。また、親子教室で絵本の大切さを訴え、親しむ機会を設けた。その実績から公民館の絵本が保健センターに配本され、ミニ図書館として利用されている。



番内和枝氏 (50歳) 助産師・静岡県

平成6年富士宮市に助産院開業

13年前、米国の思春期児童の支援体制を視察。我国にも相談窓口を作ろうと、スタッフを育成。エイズ予防のために高校生のピアカウンセラー養成講座を実施し、正しい性知識の普及を図る。幼稚園児～高校生、学校関係者を対象に講演を実施し、16,000人が受講。思春期保健対策の強化、健康教育の推進に貢献した。さらにセミナー開催の指導や、終了者のネットワーク作りなど、地域の性教育を実施する指導者の育成に力を注いだ。



飯田優子氏 (45歳) 保健師・愛知県

昭和54年佐屋町に奉職

母子保健推進員を親と保健師をつなぐ者と位置付けて組織を再構築。育成研修を実施し、健診未受診児の全数把握など虐待防止の面でも有効な取組となる基礎を築いた。身近な地区児童館での育児相談を実施。親の会支援や、育児中の親と街作りについて話し合う場に発展させた。幼児～中学生の歯科保健指導を重視し、年中児～6年生まで歯の記録ができるノートを作成。一人当たりの触本数を1/2以下にした。



大谷直美氏 (49歳) 歯科衛生士・滋賀県

昭和47年大津市に奉職

哺乳瓶とむし菌の関係に着目して歯科保健指導を実施。2歳6か月児の哺乳瓶使用率を1/3以下にした。歯磨き指導により、むし菌有病者も減少。祖父母を含めた育児者を対象に各地に出向き、また重度障害児には家庭訪問して、歯科保健指導を実施。さらに、保育所に看護職が配置されたのを機に研修会を開催し、保育所の歯科保健対策の充実に貢献。滋賀県歯科衛生士会会員に対する指導的役割を果たした。



中西真弓氏 (53歳) 保健師・大阪府

昭和46年大阪府に奉職

昭和63年より勤務した大阪府立母子保健総合医療センターで、医療と保健との連携援助に関する反省と評価を行い、自ら窓口となって連携システムを確立。周産期医療のハイリスクは母子保健のハイリスクと考えて援助し、育児不安の軽減や虐待予防に貢献した。児童虐待研究会の調査分析に参加し、各保健所とのパイプ役となった。乳幼児リスクアセスメント指標の作成など新たな課題に取り組むと共に全国の保健師の資質向上に努めた。



大垣早苗氏 (52歳) 保健師・兵庫県

昭和47年吉川町に奉職

母子健康センターを、生涯を通じた母子保健活動の拠点として事業展開。マンパワーの確保にも尽力した。2歳児健診を企画し、精神科医師を配置して相談体制を充実させ、高い受診率を維持。医療や専門機関の少ない地域におけるモデル事業の重要性を提言して異常児出産防止特別対策事業を実施。母子の追跡調査を行った研究成果は国際学会で高く評価された。アトピー児のスキンケア相談を乳幼児健診で実施し、指導効果を公表した。



廣瀬美和子氏 (54歳) 保健師・島根県
昭和48年多伎町に奉職

乳幼児期からの基本的な生活習慣、正しい食習慣の確立に向けた保護者指導の重要性に着目。在宅の歯科衛生士、栄養士の活用を提言した。小児期からの生活習慣病予防活動では、食生活改善推進員の活動として健康祭りへの参加や老人クラブへの働きかけを助言。「地域全体で健やかに子どもを育てる体制作り」を図った。母子健康手帳交付時の保健指導強化として、実態に即した妊婦保健指導を実施。周産期死亡、死産の減少に貢献した。



中山照美氏 (50歳) 保健師・香川県
昭和51年国分寺町に奉職

従来個別指導だった妊婦健康教育に集団教育を導入し、仲間作りや不安解消に効果を上げた。町健康祭りに学校養護教諭や栄養士の協力を得て参加。生涯を通じた健康作りの啓発を図ったことで、特に中学校が健康への関心を高め、子どもを社会に送り出す責任として学校が核となって地域ぐるみの事業に取り組んだ。また従来の母子保健事業以外に、いつでも相談に対応できる陣容を整えた結果、相談件数が増えて育児不安の解消につながった。



原 寛道氏 (52歳) 医師・佐賀県
昭和56年佐賀整肢学園に赴任

県内唯一の障害児療育総合施設、佐賀整肢学園園長に就任以来、整形外科的診療のみならず、障害児の療育を総合的に進める観点から通所の療育事業を開設し、充実を図った。県内全保健所の療育相談嘱託医として早期発見・療育に尽力。全保健所が精密検査機関として機能するようになった。神経学的診断法により脳性まひの早期発見を可能にし、障害児療育システムを構築した。県内療育相談受診者の65%を診察、多大な貢献をした。



茨 聡氏 (45歳) 医師・鹿児島県
昭和56年鹿児島市立病院に勤務

鹿児島市立病院においてハイリスク妊婦の管理を積極的に行い、地域医療推進の指導者として活躍。病的新生児など入院要請のあった児は全例受け入れ、治療に専念。全国に先駆けて膜型人工心肺による呼吸循環補助法を導入し、多数の新生児を救命した。ドクターカーによる新生児搬送を率先的に行い、県内の搬送ネットワークの確立に尽力。九州各地に搬送地域を広げた。また県内の周産期医療従事者の教育・啓発活動に貢献。



丸山路代氏 (54歳) 保健師・名古屋市
昭和45年名古屋市に奉職

妊婦、乳幼児健診の追跡クリニック（心理面）を開設。保健師が家庭訪問して実態を把握し、生活場面に合わせた具体的な指導を可能にした。障害児を持つ親の会を開催し、児の学校入学に関する情報不足を学級見学を企画するなどしてサポートした。1歳6か月児健診後のフォロー体制の見直しについて研究発表し、スクリーニング技術の適正化・母子管理の適正化・保健師の保健指導の技術研鑽に尽力。効果的で有効な保健指導に貢献した。